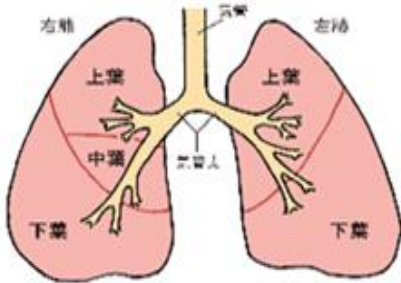


肺がんについてのお話



<肺とは？解剖と役割>

肺は左右に1つずつあり、右肺は上葉・中葉・下葉の3つに、左肺は上葉と下葉の2つに分かれています。肺は体の中に酸素を取り入れ、二酸化炭素を排出する役割(呼吸)を担っています。呼吸により酸素は血液中に取り入れられ、血液中の二酸化炭素は吐き出されます。

<肺がんの統計>

2016年のデータでは、がんによる死亡において肺がんは男性で第1位、女性で第2位と男女ともに上位となっています。また2006年から2008年に肺がんと診断された人の5年対生存率(あるがんと診断された場合に、治療でどのくらい生命を救えるかを示す指標)は男性で27.0%、女性で43.2%とほかのがんと比較して、低い数値となっています。

<肺がんの症状は？>

早期では無症状なので症状による早期発見はほとんどありません。無症状の肺がんにおいては、検診で胸部X線検査やCT検査を行い発見される場合や、ほかの疾患で検査を行い偶然発見される場合が多くあります。例えば大腸がんで手術を行い、手術後の定期的なCT検査で肺がんが発見される場合などです。がんの進行による症状としては、咳や血痰・呼吸困難・胸痛などがありますが、かなり進行した状態(ステージⅢ期やⅣ期)でも症状が出ないという場合も少なくはありません。また、骨への転移による痛みで肺がんが発見されるような場合もあります。肺がんだけではありませんが、症状が無いから大丈夫とはいえません。

<肺がんと診断されたら？>

肺がんと診断された場合の治療方法には手術・放射線治療・薬物療法があります。また、これらを組み合わせて行うこともあります。がんの進行の程度や体の状態、また、肺がんの種類(非小細胞肺がんと小細胞肺がん)などにより治療方法を選択します。がんの進行の程度は病期(ステージ)といわれます。ステージはⅠ期からⅣ期までの4段階あり、Ⅳ期が最も進行した状態です。ステージは腫瘍の大きさや周囲への拡がりの程度、リンパ節転移の有無、ほかの臓器への転移などにより決定されます。非小細胞肺がんはⅠ期、Ⅱ期、またⅢ期の一部が手術によって完治する可能性がある段階とされています。薬物療法や放射線療法を併用することもあります。小細胞肺がんは、手術が可能な早期に発見されることは少なく、中心となる治療は化学療法です。Ⅳ期と診断された場合は薬物療法が中心となりますが、薬物療法のみで肺がんを完治させることは難しいのが現状です。

<肺がんの手術>

肺がんの手術は全身麻酔で行われる開胸手術と、胸腔鏡手術があります。開胸手術は、腫瘍が大きい場合などに行われる切創の大きな手術です。胸腔鏡手術は胸腔鏡というカメラを小さな切創から入れて、モニターの映像を見ながら行う手術です。胸腔鏡手術は切創が小さく、開胸手術よりも身体への負担が軽減されます。当院では胸腔鏡による手術を積極的に行っています。

— 筆者紹介 —

わたなべ はじめ
渡邊 創

1980年生 静岡県出身

2005年 東海大学医学部卒業

東海大学医学部外科学系呼吸器外科学 講師
附属大磯病院 呼吸器外科所属

所属学会: 日本呼吸器外科学会 日本外科学会
日本胸部外科学会 日本肺癌学会 など